

## さやま市民大学シンポジウム「これからの市民大学」

令和6年7月19日（金）14時30分～

中央公民館 第1ホール

### 【司会】

それでは皆様、こんにちは。本日はご多用のところ、さやま市民大学シンポジウム「これからの市民大学」にたくさんのご来場をいただきまして、本当にありがとうございます。

私は本日の司会を務めさせていただきます、自治文化課狭山元気プラザの荒井と申します。よろしくお願いいたします。

シンポジウムに先立ちましてご来場の皆様にお願いがございます。会場内でのスマートフォン携帯電話等は電源をお切りいただくか、マナーモードに設定をいただければと思います。

また、本日の気温が高くなっておりますので、適宜、水分補給を各自でお願いできればと思います。体調が優れない場合には係員に遠慮なくお申し出ください。市の職員は、こういう名札をしておりますので、お声がけいただければと思います。本日は記録用の撮影が入っております。お顔が映らないように配慮はさせていただきますけれども個人として、配慮をご希望される方は事前にお申し出いただければと思います。その他のシンポジウム中の写真撮影や録音、録画は禁止させていただきますので、ご協力をお願いいたします。

それではただ今より、さやま市民大学シンポジウム「これからの市民大学」を始めさせていただきます。

さやま市民大学は、「元気な狭山を支える人作りと人を活かす仕組みづくり」を理念とし、「まち作りを担う人材の育成」、「学びの成果を地域社会の中で生かす仕組みづくり」、「学びを通しての生きがいづくりと仲間づくり」を目的に、平成26年4月に開設いたしました。市内在住・在勤・在学の16歳以上の方を対象としております。

開設当初、「まちづくり学部」と「いきがい学部」の2学部、その下に11の学科、年間19講座を設置し初年度の受講者数は415名でスタートいたしました。

近年においては、コロナ禍により事業を中止せざるを得ない時期を経て、令和5年度まで継続してまいりました。

これまでの継続の中、NPO法人や地域活動団体の設立など、修了生の様々な活躍がございました。

一方で、講座内容や事業運営、受講年齢層等が固定化し、市民大学事業の流動性が損なわれつつあったことを、運営側として認識し、反省しております。

開設から10年を機に運営方法などの見直しを図ることを目的として、本年3月をもってさやま市民大学は休止しております。

設立の理念に基づき、これからの市民大学の運営について改めて見つめ直し、幅広い世代に訴求する、修了生と地域との連携をしっかりと市民大学が後押しできる仕組み

を検討してまいりたいと思います。

本日は皆様と一緒に様々な事例を学ばせていただきたいと考えております。

それでは、初めにさやま市民大学山本学長よりご挨拶をお願いいたします。

#### 【山本】

皆様こんにちは。ご多用のところ、また梅雨明けの大変お暑いところをご参集いただきましてありがとうございます。

学長を昨年度から任命されて就任しております山本といたします。

どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、先ほど司会の方からもございましたように、10年過ぎたところで、さやま市民大学のあり方を再検討するべきときではないかと思い、今回、このような催しを開催させていただくことになりました。

皆さん方のこれまでのさやま市民大学に対するいろいろなご要望等もありましたでしょうし、希望と言いますか、いろいろな活躍を、このさやま市民大学を基にされた方もいらっしゃるかと思いますけれども、さやま市民大学をただ、市民大学を考えるだけではなく、幅広く狭山市以外の市民大学はどのような大学であるのか、そういったことも十分理解いただいて、今後のさやま市民大学を考えていくことが大事ではないかなと考えているところです。

私も一緒にここで勉強させていただいて、従来のさやま市民大学を大きく発展させていく方向を考えていきたいと思っております。本日はどうぞ最後までよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

それでは次に、本日パネルディスカッションを行っていただく方々についてご紹介いたします。

まず、ただいまご挨拶をいただきましたコーディネーターをお願いしております、さやま市民大学の山本和人学長でございます。

よろしくお願いいたします。

学長は現在、東京家政大学名誉教授、同大学院客員教授、日本生涯教育学会常任顧問等をされております。また、さやま市民大学の学長には、令和5年4月1日より就任されております。

次に、本日のパネリストのご紹介をさせていただきます。この後、発表していただく順にご紹介いたします。

最初に坂口緑様をご紹介いたします。

こんにちは坂口です。よろしくお願い致します。

坂口様は、現在、明治学院大学社会学部教授、日本生涯教育学会事務局長等をされております。市民社会論、生涯学習論を専門に研究されており、主な著書には「デンマーク式生涯学習社会の仕組み」、「日本における市民大学の系譜と特徴」等がございます。

次に大澤悠希様をご紹介させていただきます。

こんにちは大澤と申します。よろしくお願いいたします。

大澤様は、特定非営利活動法人シブヤ大学の2代目の学長として、自分たちの生きる社会のことを安心して話すことができる学びの場をつくるため、シブヤ大学の講座企画・ブランディングに取り組んでおられます。

次に、近藤真司様をご紹介いたします。

こんにちは今日はお招きいただきましてありがとうございます。雑誌、社会教育の編集長をやっております。よろしくお願いいたします。

近藤様は、一般社団法人日本青年館「社会教育」編集部編集長をされており、全国の市民大学の事情に詳しい方でございます。

本日皆様にお配りいたしました資料として雑誌、「社会教育」2020年7月号を頂戴しております。

この資料には、今回パネリストとしてご登壇いただく坂口様とシブヤ大学学長大沢様の前の学長左京様との対談を近藤様が司会をされた記事が掲載されております。

最後に郡谷寿英様をご紹介いたします。

こんにちは。北海道科学大学から参りました郡谷と申します。ちょっと久しぶりの埼玉なので穏やかに務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

郡谷様は、北海道科学大学全学共通教育部専任講師をされ、社会的活動としてもICTの活用分野でご活躍されております。専門は社会心理学生涯学習論で社会教育施設におけるICTの活用と今後の研修等のあり方に関する研究などがございます。

本日はパネリストおひとりずつに事例発表をお願いし、パネリストの対談の後、会場の皆様からの質問等をお受けいたします。

それではコーディネーターの山本学長よろしくお願いいたします。

#### 【山本】

それではこれより私の方でコーディネーターを務めさせていただきます。ご発表の順番は、先ほどご紹介のあった順番でお願いをしたいと思います。

4名のパネリストのご発表を私から質問させていただく形で対談を進めていきたいと考えております。

そして発表時間は10分を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

生涯学習が非常に叫ばれていた時代から、生涯学習の定着と同時に社会状況は当時の状況とは異なってきました。

そのような中で、生涯学習社会と市民大学についてこれから学ばせていただきたいと思っております。それでは坂口様、ご発表の方よろしくお願いいたします。

【坂口】

はい、ご紹介ありがとうございます。改めまして坂口です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は生涯学習社会の変化と市民大学ということで、生涯学習の話、そして市民大学の話二つについてお話したいと思っております。

最初に私は、生涯学習論を研究する1人として市民大学に大変関心を持ってまいりました。

狭山市の市民大学は私のような研究者からすると自主的に立ち上がり、そしてM&A統合を経て、そしてまた約10年続いてきたという意味でも非常に先進的な市民大学の一つと思ってきました。狭山シニアコミュニティカレッジから狭山元氣大学、そしてさやま市民大学になっていった。

他方で同じような変化、社会変化の中でお悩みを抱えている他の市民大学ということもあるということで、今回は狭山市の市民大学がどういう状況に置かれているのか、その周りでどんな生涯学習に関する政策が変化したのかというあたりをお話できればと思っております。

最初に狭山市の総人口と世帯数の変化というのをグラフにしてみました。

こちらはここに関連のある皆様なのでよくご存知だと思いますが、2024年1月で実数14万8872人というのが総人口のようです。

2009年には15万8000人ぐらいだったということなので十五、六年でちょうど1万人ぐらい減少したというのが今の経過です。

世帯数はどうか、世帯数を見てみましたら実は2024年には7万2000世帯余り7000世帯ぐらい増えている。

これどういうことでしょうか？10年ぐらい15、6年かけて人口が減ってくる。

でも世帯数は増えている。流入してる人がいるということです。

でも、流入してる人はおそらく単身の人ではないかと、皆さん若い人かもしれませんし、もしかしたら高齢の方、シニア関連のマンションができたりすると増えたりするんですけども、ということでどんな人が来てるのかなって見るときは、高齢化率も合わせてみるといいのかもしれないんですが、こちら狭山市と全国の高齢化率というのを推計も含めて示された折れ線グラフです。

日本の高齢化率2023年で29.1%って言われてます。

2024年今年にはもう30%を超えるだろうと言われているんですが、狭山市の場合は、全国平均をやや上回る数字が出ています。

これ推計の数字も入っているのですが高齢化率2023年で約32%です。

2000年ぐらい最初のさやまシニアコミュニティカレッジが始まった頃は、65歳以上の人が5、6人につき1人だったというのが、25年経って、32%なので、3人に1人ですが、65歳以上になったっていうそういう状況です。

これだけではいろいろわからないんですけどもただ身近なことを考えていただくと、もしかしたら元々4人5人で住んでいたご家庭からお子様皆さん育って、他市に転居して高齢のご夫婦だったり、おひとりだったりという方が残るそんな感じで世帯数は変わらなくても、高齢化率が結果的に上がっていくということも考えられる

のかなというふうに思います。

そんな中、日本の社会も実は生涯学習、ずいぶん前から振興ということで取り組まれてきたんですけども、その変遷というのをちょっと振り返っておきたいと思いません。

ここで取り上げるのは1980年代の臨時教育審議会という審議会があったんですが、そこで示されたこと、そして90年、生涯学習振興法というのができたんですが、そのことそして近年の生涯学習の政策を決定づけている2018年の答申についてです。生涯学習体系の移行というのは、1980年代後半、臨教審のときに議論されるようになりました。

このとき何が言われていたかって言ったら、なんか受験生があまりに大変とか、それから子供たちに詰め込み教育をしすぎだとか、そういったことが言われてました。覚えてらっしゃるでしょうか？この結果、ゆとり教育が大事とか、学校も週6日行ってたんですね。昔、5日にしましょうとかっていうことで、なるべく学校に子供たちが通う時間を減らして、地域で、あるいは自然体験をしようなんていうことが議論されてきました。

これ今でも議論されてますが、このときからそういうことが提案されてきました。これは学校教育の方なんですが、そのおかげで学校教育と社会教育、学社融合なんていうのも大事だねっていう話になっていて、学校だけに任せないで、地域で学校教育を支えるという話があった。

これを受けて1990年、生涯学習体系の移行というのを実質化するために、生涯学習振興法と呼ばれる法律ができます。

1990年です。

このときもよく見ていただくと、別に国がこうしようって言ってなくて、この法律の鍵は第3条3ここに書きましたが、地域の実情に即した学習の方法の開発を行うことと書かれていて、生涯学習大事だ。

でも、国が生涯学習をやるということ以上に、地域でどういう生涯学習をするのか地域の人が決めるよう。

そのためにそういう生涯学習を振興しよう、そういう法律としてできています。

なんでこんな流れなのかというと1990年代というのは今振り返ると、圧倒的に地方分権の時代だったといえます。

1995年に阪神淡路大震災があって、ボランティア元年と言われて実はその頃から中央集権的な統治から地方分権に移行しようというのが日本の政治の大きな流れでした。ボランティア元年があって、民営化っていうのが当たり前になって、1999年には地方自治、地方分権一括法というのができたりして地方自治を推し進めよう。なので、この流れの中で、実は生涯学習をちょっと早いんですけども、地域の実情以上に合わせた方法開発っていう発想がもう出てきていた。

そういう法律です。

ご存知のようにこの流れというのはもう不可逆的に進んでいて、現在では東北の震災もあったりして、地方創生というのが本当に日本の現在の私達の共通の課題になっているかと思えます。

それを後押しするように、もちろん生涯学習の方でもですね、2018年に出たこの答申

は地域作りに注力するということをはっきりと示したものです。人口減少時代の新しい地域作りに向けた社会教育というのがうたわれました。

まとめると、臨教審 1980 年代後半なんですからけれども、以来、学社融合と言われるような学校教育だけじゃなくて社会教育も一緒に教育について考えようという機運が生まれましたし、また生涯学習体系というのが実質化されるということもあって、地域作りが課題になる。そういう時代でした。

なんですが、1990 年代、2000 年代、今も地域地域といっても、誰のことと。地域として、かつて頼りにされていた人たちがいたかもしれない 1990 年代は、でもそこからもう 20 年 30 年経ちました。

地域って一体どこにあるのっていうのが、今多くの自治体で同じように悩んでいるのではないかと思います。

人口減高齢化というのは、狭山市だけの例ではもちろんなくて、もっと本当に困ってるところもたくさんある中、地域が実は空っぽになってるかもしれない。

そんな中で、どうやって地域のプレーヤーを生み出すのか。

これは社会教育にとっても、そして一般的な日本の自治にとって、共通の課題になっていると思います。

という中で私が専門としている中では、やっぱり市民大学というのに非常に期待したい。市民大学というのが、もしかしたらこの空っぽの地域を埋めていく、その重要なプラットフォームになるのではないかというふうに考えて、市民大学というのを実は研究してきました。

市民大学って、もちろんいろいろあるんですけれども、市民大学に期待される役割というのもまた時代によって結構変わってきているということもここでちょっと確認できればと思って持ってきました。

元々は市民大学つまり、なんちゃって大学って人によって言ったりしますが、正規の学校教育法の中の大学ではなくて、市民の人が集まって手作りで学習をするそういった場所は、実は 1900 年代ぐらいから西欧の世界では労働運動の延長で起こってきました。成人の人たちが自分たちの生活に必要なことを、集まって勉強するっていうのは普通のことなので、それが何とか大学っていうふうに言われたのはその頃と。この頃は正規の大学の方も、むしろ選ばれたエリートの人だけを相手に、勉強するのではなくて、ちゃんと街に出て行って必要な知識を得る。大学拡張運動って言ったり、大学の公開講座なんかが行われるようになりました。

1920 年代、実は日本でも、西欧の大学拡張の労働運動の影響を受けて、自由大学運動というのが始まっています。

詳しくは入れないんですけれども、有名なのが信濃自由大学、長野県上田市で始まったものです。

この方々は帝国大学の先生方呼んで、農作業がちょっと暇になる冬の間、高尚な授業を受けるっていうことを自分たちで企画して運営していたんですが、雑誌自由大学というのを発行したこともあって、全国で同じような例が展開されるっていうことがありました。

これは戦後になって、実は庶民大学三島教室みたいな形で反復もされています。自由大学の伝統というのが 1920 年代、大正時代に大正デモクラシーの一環として始まった

んですが、戦後になってもちょっとずつ継続されています。

自治体でも、今度は市民大学をむしろ 1970 年代ぐらいでしょうかね、社会教育講座の修了生たちが集まれるようになっていうことで、自由大学という名前だったり、市民大学という名前だったり始めるようになっていきます。

それらの市民大学というのは、実は社会教育生涯学習論の世界ではちゃんと調査をされてきました。

例えば 1993 年の調査では、市民のために高等教育に匹敵するような学習機会を提供する、これらの動きが全国で見られるということで、このときの市民大学は何か。池田先生という方はこんなふうに定義しています。

伝統型大学の枠を超えた、いわばノンフォーマル型の高等教育機関。伝統型大学っていうのが正規の大学なんですけど、それとは違う形で市とか県とかが主催する大学講座なんだけれども、やってることは高等教育である。

これが 1990 年代ぐらいにまとめられた市民大学でした。

その後、2000 年には田中先生たちがまた同じような調査をしているんですが、この間にちょっと違う大学が出てきたと、それは何かといったら市民も先生になると先生も、それから受講生も市民であるっていう、お互いがお互いを教え合ったり、教えたり学んだりする。

そのような自主的に市民の人たちも運営に関わる、そういう市民大学が現れてきたということが記されています。

さやま市民大学も基本的にはこの方式というのを実は早々にきちんと取り入れていたのではないかなというふうに思います。

私はその後の時代について調べたいと思っていて、勝手に新しい市民大学と呼んでるんですけども、2000 年代出てきたいくつかの大学といったところを調べています。昨年の冬に数えたら全国で 65 校ぐらい、これに当たりそうな新しい市民大学というのが、ありました。今日これからご報告いただけるシブヤ大学が、もうこの新しい市民大学の最初じゃないかなというふうに見ているんですけども、2006 年です。

何が新しかったかというと、

1. 自治体と関係なくやる。
2. 完全無料である。
3. これはちょっと場所によるんですけども、拠点がない場合が多い。

店先で勝手に講座をしたりするんです。

公園に集まって今日のプログラムやってみましょうってしたりする、そういった大学と称しながら、特に教養を身につけるための講座を提供しない。

なんかわいわい部活のような、なんちゃって大学というのが 2000 年代になって見えてきました。

こういった大学っていうのが大学って言ってるだけでしょと、単なる遊びでしょっていうふうに最初は見られていたこともあったと思うんですが失礼ながら、でもよく見てみると、これは自由大学の発展系なんじゃないかなというふうに私は思ってたんですけど見えてきました。

ちょっといくつかご紹介します。

一つ目です。2 畳大学です。2008 年から生まれてます。

これはですね、現在も続いているところなんです、自宅を借りたら、何か余計な2畳の間ってのがついてた。

この2畳の間を有効活用できないかって考えたその部屋を借りた梅山さんっていう人が大学をやろうと思いついて始めたものです。

本当は冗談のようなものなんです、でも毎月1回、欠かすことなく第3月曜日の夜、オープンキャンパスっていうのをやってきました。

その2畳を誰でも来ていいよって開くっていう、そういった活動です。

そしたら、そこに集まってきた人が、いろんな要望とか、相談事を持ってきて、実はちょっと今度大学院受験したいんだけど、大学院受験するの誰もそんなことをちょっと支援できないけどって言ったら、でも知り合いならこの前受験した1人を応援するとか、そんな形でプロジェクトがたくさん動いていく、そういう出会いの場をずっとプロデュースし続けるそんなことをしています。大阪のほうです。

次は、柏まちなかカレッジです。こちらも2009年に始まっています。ここも拠点がないんです。

拠点がなくて、柏市の周辺に集まるいくつかの団体がちょっといろんなことやって、面白いからみんな一緒に大学やろうって言って始まったものです。

この写真は、セレクトショップの前の駐車場2台分のところでやっている防災訓練の様子です。

これはセレクトショップにやってくる、柏の町に住んでないけれどもお買い物に来る若い男性が「地震が終わったらどこ行ったらいいかわからないです」というのを聞いた店主の人がこの大学をやっている人に相談して、じゃあ1回ここで防災訓練しようで始めたものです。これだけじゃなくていろんなことやってます。でもこういう防災訓練にやってきた方が、今では、柏市の例えば新中央図書館の構想会議っていうのがあるんですけどそこで、図書館、僕も使うからって言って、もと学生だったり今もう就職した人ですけども、委員の1人で参加していたりするそうです。

やってみるもんだなっていうのはこの柏の方が言ってました。

こすぎの大学っていうのもあります。武蔵小杉です。

ここでは月に1回、これ町内会館のちっちゃい和室を借りてやってる。

今は中原区の区民会館を借りてやっている会です。

武蔵小杉の街と人を繋げるっていうことで、ここも10年ぐらいやってます。なんか働いてる人が来やすい時間帯っていうのを意識して、いつも19時28分からやってると。19時30分と言うと絶対社会人は遅れてくるそうですよ5分ぐらい。なので28分。

最後にこちらご紹介させてください。

兵庫県尼崎市のみんなの尼崎大学です。2017年から始まっています。ここは市長部局です。尼崎市が完全に100%運営している市民大学なんです、かつての教養型と全然違うんですね。

全然違って何をしてるかと言ったら、生涯、学習！推進課っていう課を作ってもらって、とにかくみんなが先生になって、楽しく学ぶ、学びって楽しいっていうことを、子供も大人も、お年寄りも障害持ってる人も外国の人もみんなに経験してもらおうということのために、市長さんが旗を振って始めた、そういうものです。

ここは別に社会教育課があって、ちゃんと公民館があるんですけどもそれとは別にこの事業立ち上げたことで、従来の社会教育の人権教育なんかやってるセクションと、それからみんなの尼崎大学で何か楽しくカレーとか作ってる人が混ざるようになったっていうふうには言ってました。

コロナの間も非常に活発に活動して、とっても面白い活動をしていました。

町に学びを巻き起こすっていう、これが彼らのモットーなんですけど、私が一番注目しているのは、コンスタントに相談会っていうのをしていることです。

昼の相談会、相談室っていうのと夜の談話室っていうのを両方やっていて、そこに行くと、市民大学の何か企画に自分も参加できたり、今度こういうイベントがあるんだけど、誰か知り合い紹介してくれっていうことも紹介するっていうか、市民活動を繋ぐ場所でもあり、学習の場を広げる場にもなっている。

何かこの相談っていう機能をきちんとシステムとして活かしている、わかって活かしてるっていうところが本当に面白いなと思って見えています。結局そうすると、一部の人が汗かいて一生懸命やらなくても、いろんなアイデアが集まってくる。

ちゃんと定期的な場所を空けておくと、やってくる人がいる。もちろん誰でもやってきてくださっていう雰囲気をもっとすごい一生懸命出してるんですけど、それも市がやっているっていう安心感がある、そんなことでうまく回ってる例かなというふうに思います。

なので、市民大学は教養を伝授する場所から、学習機会を提供するという場所になったんですが、今はおそらく地域のプレーヤーを生み出す、そういうプラットフォームになってるんじゃないかなというふうに思います。

狭山市のさやま市民大学もこれまで以上に新しい人に扉を開く方法、相談に来てもらえる場所になるといいんじゃないかなと思ってご紹介しました。

以上です。ありがとうございました。

#### 【山本】

先生ありがとうございました。

それでは次にシブヤ大学の澤様よりご説明をお願いしたいと思います。シブヤ大学は若い方の参加が多いというふうに伺っております。そのことも含めてシブヤ大学が目指すもの、活動の様子をご発表お願いいたします。

#### 【大澤】

改めましてこんにちは。NPO 法人シブヤ大学で学長をしております、大澤悠希と申します。私自身は他の登壇者の皆様と違って、キャリアも浅いですし、専門家でも何でもないんですけども、今回若年層が多く集まる市民大学の事例として、本日お呼びいただいたので、日々渋谷の街を舞台にした学びの場で、自分自身が考えていることですか、感じていることをベースに、本日はお話できたらなと思っております。まずシブヤ大学とは何かということについて、簡単に紹介させていただきます。シブヤ大学は街全体をキャンパスに、多様な学びの場を提供する NPO 法人です。2006 年に設立されて今年で 18 周年を迎えます。私自身は、先ほど少しお話にもあったんですが、2020 年にシブヤ大学自体がリニューアルをしまして、学長を初代の学長から次世

代に継いでいこうということで世代交代をする流れで2代目の学長に2020年に就任をしました。

メインの特徴をお話しします。

坂口先生のお話にも通ずるんですけれども四つほどありまして一つ目が、授業が無料で誰でも気軽に参加できるという点です。

二つ目が先ほど申し上げたように特定の拠点を持っていなくて街全体をキャンパスに見立てて、いろんな場所を教室として、授業を開催しているところです。

三つ目が、多くのボランティアスタッフによって運営されております。

今フルタイムのスタッフは私を含め1、2名ですね。他は皆さん、平日は仕事をしながらですとか、子育てをしながらボランティアとして関わっているというところです。

四つ目が、ボランティアスタッフになると、作り手にもなれるというところで、ひとりひとりが授業の当日の運営だけではなくて、企画の部分から、自分自身が今受けたい授業、今こういうものが欲しいな、こういう時間が欲しいなと思ったときに自分の企画をできるっていうところも大きな特徴になっております。

このあたりはですね、リニューアルをした当初に2020年のときに大事にしたいこととして掲げているものなんですけれども、見つける学び場ということで自分自身で何かを主体的に見る場であるっていうことですか、あとこちらは大事にしたいキーワードというところで誰かとともに学び合うことだったりとか、楽しい学びから、少し真面目に話したい真剣に話したいんだけど、なかなか話せる場所がないってようなテーマまで幅広く展開をしております。

少し古いデータにはなってしまうんですけれども、これまでに18年間で開催した授業というのが1500講座以上で、これまで単発の講座が多いので、参加人数ですとか、授業数っていうのもこのような形になっております。

若年層が多いということで少し小さくて見づらいかもしれないんですけれども主な参加者の年代としては3、40代が一番多いような状況です。

その次に20代50代が多いといった形で、働いている層がすごく多いのが特徴かなと思います。

なので属性を見ても、会社員ですとか公務員とか先生をされてる方とかが非常に多いかなと思います。これが実際の授業風景なんですけれども左上が渋谷にあるもの作り企業の工房を教室にした授業ですとか、あとは真ん中がハチ公の前ですかねこれは街の中でまち歩きをしながらやる事業ですとか、あとは右側は80歳ぐらいのおばあちゃんと大学生がジェンダーの問題について、論論をしているような講座ですね。下はちょっとわかりづらいんですが、左下はSDGsの結構テーマの大きな授業なんですけど、先生は高校生ということで、高校生の子たちが先生として登壇をしてくれたりとか、真ん中は昨年ですね、ウクライナの避難民の方に登壇いただいて、という形で本当に先生も専門家の方から商店街の八百屋のおじちゃんまでっていう形で、テーマもなんですかね着物の着付けとか趣味的なものから、デモクラシーとか環境問題について考えるものまで幅広く実施をしております。

ここ数年で力を入れていることとしては、こちらが渋谷をつくるゼミということで名前の通りなんですけれども渋谷の街を舞台に、自分たちが渋谷に欲しいものとか渋谷にあったらいいのになと思うものっていうのを、企業に最終的にプレゼンをして、ア

アウトプット、実走するとこまで目指そうといったような、半年間かけて同じメンバーで行うようなゼミ形式の授業ですとか、あとは、インターナショナルデーということでデンマークの教育機関なんですけれども、フォルケホイスコーレという教育機関の学生に来日していただいて、国内外の教育機関と連携したような講座も行っております。

こちらもそうですね。京都のあやべ市民大学というところと連携して、ときには渋谷を飛び出して渋谷の外で学ぶっていうことも提供をしております。

今日が若年層が多く集まる市民大学の事例として、お話をさせていただけたらということでしたので、ここからはシブヤ大学に参加者やボランティアとして関わってる同年代からの声ですとか、私自身は先ほどの坂口先生の話にあった、ゆとり世代なんですけれども、私自身も感じていることも含めて今若い人たちが学びの場に求めているものの仮説として、あくまでもシブヤ大学が考える若年層のニーズっていうところも少しお話できたらいいかなと思います。

まず私達が今の時代をどう捉えているのかっていうところからお話すると、これすごく主観的な部分も入っているんですけれども、やっぱり昔に比べて、すごく多様性が尊重されて、キャリアですとか、家族のあり方ですとか、暮らす場所とか選択肢もどんどん増えて自由になった時代なのかなと思っております。

でもそれと同時に、自由すぎて何をしてもいいよ何やってもいいよ、自分らしく何してもいいよ自由にしていってと言われて、でもそもそも自分が何をしたいかわからないとか選べないんだけど、自分自身で正解を決めないといけないみたいなところで、そういった悩みがすごく深刻化しているように思います。私自身もそうなんですけど、自分自身の価値観とか大事にしたいことが、よくわからないまま、なんか結局は昔からの価値観ですとか何か外に正解とか評価基準とかを求めてしまって苦しくなってしまう自分で人生を歩んでいる自分で決めたっていう感覚が薄いついていうことが往々にしてあるのではないかなと考えています。

そういったことを踏まえて、シブヤ大学では個人の選択に委ねられる範囲がすごく広い時代に自己決定感のようなものを高めるために、自分の価値観に向き合って調整していくような学びの場が必要なのではないかというふうに思って、先ほどの誰かが関わられる学びの場ですとか、気軽に参加できる多様な授業っていうところを通して多様な価値観、多様な人の価値観に触れるインプットの機会と自分の価値観を安心して話したり自己表現をしたりする、アウトプットの機会っていうところを提供するっていうところをやっております。

そういったことを通して、何かご自分の人生とか社会の変化に合わせて自分の価値観に基づいた行動ができて、自分らしく生きる人が増えるみたいないところを目指せるとすごくいいなと思って活動しております。

ちょっとお手元の資料と順番が後になっているかもしれないんですけれども、実際にシブヤ大学に参加している若い層からは、今お話したようなことで環境も年齢も違う人たちと話ができることが貴重であるとか、人の話を聞いて、自分の考えを伝えるっていうことができよかったっていうような意見が出ていたり、より継続的に作り手として関わっているボランティアからは、会社だと主語が「弊社は弊社は」って話しているんだけれども、シブヤ大学に来ると何々さんの思いっていうふうに関

てもらえるので、自分の言葉で話す大切さを取り戻す訓練のためにたまに来てますとか、あとは最後まで話を聞いてくれて、まとまってなくても話せるみたいなところで、そういう大事な場だっというような声が集まっています。

最後にこれからのシブヤ大学ですね、今後の展望のところについてお話しできればと思います。

突然のび太くんの家みたいな一軒家が写ってるんですけども、つい先月、幡ヶ谷の一軒家を実は借りまして、事務所を移転することにしました。

さやま市民大学さんもすごく素敵なあの校舎を活用した拠点をお持ちだと思うんですけども、シブヤ大学も実はリニューアル当時からシブヤ大学のオフィスはいわゆる渋谷のキラキラしたオフィスのような場所ではなくて、みんなが実家のように、東京の実家のように帰って来れる一軒家にしたいっていう場所が実はずっとありました。渋谷という街の特徴として、やっぱり特に若い人たちはもう常に戦闘モードで、東京が地元ではない人も多いので、地元から離れて日々走り続けているような人が多いと思っていて、私達の世代というのは、やっぱりサブカルに聖地みたいな印象はほとんど実はなくて、いつ来ても人が多くて、常に変わり続けて結構気合いを入れて勝負をしに行く街っていうような印象がすごくあるんですね。シブヤ大学はそんな渋谷の街の流れの逆を行こうっていうのが2020年以降の大きな軸として渋谷だけど時間がゆっくり流れているとか、渋谷だけど公園のように無料で楽しめるとか、渋谷だけど田舎のような温かさがあるみたいなところで、これまで通り、街のあちこちで授業を開催しながらも今後はこのお家を使って、写真にあるような、これは何かコミュニティダイニングとかっこいいんですが食事会をしたりですとか、他にも都市で失われてしまうようないろんな機能を取り戻すようなプロジェクトっていうのを、これまでやってきた授業っていう学びの手段に加えて始めていきたいなと思っています。

最後にちょっとこれもまた小さくて恐縮なんですけど、まだ実はこれは公開してないものになるんですけども、今有志のボランティアスタッフ6名と一緒にですねシブヤ大学の未来予想図のようなものを作っていますこの半年間セオリーオブチェンジという、何か評価のモデルの図があったりするんですけども、作っています。

シブヤ大学のドアをたたこうと思った人が、そのドアの先にどんな世界が広がっているのかがわかったりですとか、シブヤ大学に参加した個人にどんな変化が起こっていてそれがどのように社会の変化に繋がっているか、みたいなものを表そうと思ったものです。ここにはもう既に起こっている変化から、今後起こってほしい変化まで、シブヤ大学の本当に未来地図として作ったんですけども、ここで、すごくこだわったのが渋谷の街を舞台にはしているんですけども、あえて町の視点ではなくて個人の視点で書くっていうところをすごく重視しました。

先ほど参加者の声にもあったように、シブヤ大学が若い人たちが多様な価値観と出会うとか、自分の考えを安心して話せるっていう場になってる、それをシブヤ大学でできていることはすごく嬉しいんですけども、それをシブヤ大学に来ているときだけではなくて、社会全体がそうなるように、シブヤ大学でそういった経験をした個人が自分の日々のコミュニティにそれを持ち帰ったりですとか、そこでやっぱり対話を大事にしようとか、自分らしく行動しようっていうふうになるように、さらにそこから日常生活から、もう少し大きな社会的な取り組みに繋がっていく

ような、自分たちの力で社会を良くしていこうと行動する人が増えていくような、そんな導線を作っていくことってというのが、今後のシブヤ大学の役割なのかなというふうに思っています。

さやま市民大学にも、今後自分自身とか自分の今いる環境をアップデートしたい、何か変えたいなって思っているような人たちがここに来ると、一歩踏み出せるとか、やってみたいことにチャレンジできるっていうような、背中を押す場所として若い世代の参加がもっと増えるといいなというふうに思います。その一つのヒントとして、まちづくりのための生涯学習といった、まちからの視点だけではなくて、狭山に住む若い方々がどういったことに、わくわくしたりモヤモヤしたりどんな場が欲しいと思ってるのかみたいなのところの、個人の視点から場を作るっていうところが、結果的に良い地域を作っていくっていうところにも繋がるみたいなのところで、シブヤ大学の活動が、少しでも今後のヒントになったら嬉しいなと思います。

私からは以上になります。ありがとうございました。

#### 【山本】

ありがとうございました。

時間の関係で各発表者のまとめはしませんけれども、続けて進めさせていただきます。近藤様からは、これまで各地の取材をされるなど、幅広く事情ご存じですので、全国的な市民大学の状況についてご発表をお願いしたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

#### 【近藤】

私は、皆さんの机の上にあれば見ていただきたいんですけど、社会教育という雑誌を担当して実はもう気がついたら32年ぐらいたってまして、1991年からこの雑誌作りに携わっています。

ここ30年間ぐらいの動きとして、社会教育生涯学習で非常になんていうか、興味があるものとして二つあるとすると、一つは市民大学という動きと、もう一つが出前講座という届ける学びみたいなものです。今日はこちらの雑誌の表紙見ていただくと、左上の雑誌名の社会教育の上に「社会をつくる学びを提案する」というこれがこの雑誌のキャッチフレーズになっています。

ちょうど2020年の7月というのは、雑誌作りは2、3ヶ月ずれておりまして当時今日いらしている坂口先生と、あと大澤さんの前のシブヤ大学の学長の左京さんと対談をお願いをして、ちょうどそれがコロナの年の2020年の4月になったばかりのとき、たまたま考えたテーマが、実は今日の話に繋がるなということでバックナンバーをお持ちしました。ぜひお時間のあるときに見ていただければと思います。ここで創刊75年目ということなんですけど、おそらくここにいる方でほとんどの方、知らないと思うんですけど、社会教育法という実は法律がありまして、それができて、ちょうど75年経ったんですね。6月の10日、時の記念日が、社会教育法ができた日ということで、今もう7月になりました。そういう流れの中にあるということで、冊子を見たり、このスクリーンを見ながらお話を進めさせていただきたいと思います。

まず、今日三つのことをお話したいと思います。一つはその情報というキーワードですね。

それから市民大学の動向と、先ほど坂口先生のお話、それから大澤さんの話の補足的な話になると思います。

それから三つ目、すごく大事なものは、居場所というような概念ですね。横文字で言うとサードプレイスとかいうような言葉も使いますが、要は例えば仕事をしていれば職場と家庭が二つある。と、もう一つの場所とよくサードプレイス三つ目の場所というような考え方があります。皆さんのお手元にある7月号の中で坂口先生が出ていただいた対談ですね。

そのキーワードというのは場所を限定しない、学びのデザインというようなこととか、ソーシャル系大学というのがキーワードになっていました。

最近ですね、キーワードになってるのが地域大学、ローカル系大学とまさにだんだん地域密着になってきているという傾向があります。

それからすみだ学習ガーデンの記事がありますけれど、こちらはちょうど2000年にNPO法というのができて、NPO法人ですね、特定非営利活動法人というようなものの先駆けで作られたすみだ学習ガーデンが発展して、実はNPO法人が2018年に解散をしたというようなところですね。そういうことと、地域での学びをどういうふうに作っていくかというプロセスをメルボルン大学の小川先生と、もう1人武本さんという地域でボランティアとしてすみだ学習ガーデンに関わってきた方、その方がすみだのNPOの最後の解散するときの理事長であったと、つまりそういうことを振り返って反省をしながら書いている記事です。

後で時間があれば触れたいと思います。

それからもう一つの記事として、隣にいる北海道科学大学の出口先生が書かれたところでいうと、まさに今実は学校コミュニティスクールということで、地域の中にある学校ということで、これから目指すのはスクールコミュニティの学校が拠点になって人々が繋がるというような話も出ているところです。情報の話で、すごくはしょって言いますと世界的に有名な生涯学習の、メリアム先生という女性の先生が2010年に来日してたまたまお話する機会があって、そのときの講演のキーワードで、私がすごく気になったのは、知識の時代と、73日ごとに情報は倍増していくという、急激な変化が起こっているというのが14年前のお話です。

そこで具体的な例で、例えば地震が来たらどうするかというので、私も昨年まで大学で成人と学習という授業を持たせていただいたときに、大学生の皆さんに大地震についての教材映画を見せたときにどういう感想があったかという、情報を普段から仕入れて実践することが大事だということが出てきました。実際に実は皆さんを取り巻く環境っていうのはいろんな問題があるわけです。

先ほど坂口先生が、生涯学習振興法ができたのが1990年と、その後に生涯学習審議会というのが出来まして、どういう課題があるのかと、今でいうと共生社会に繋がるもの、命とか健康人権、人間性、家庭家族、消費者問題、これいつまでたってもなくなりません。地域の連帯、まちづくり、交通問題、最近は新しい乗り物がどんどん出てきたりとか、高齢化社会、男女共同参画、あるいは科学技術もどんどん変わってきています。それこそチャットGPTじゃないんですがAIが文章を勝手に作ってくれるみたいなどころとかですね。

あるいは国際理解、国際貢献、あるいは人口、食料、環境、エネルギー—いろんな問題

があると、こういうことをどんどん変わっていくので、学校だけなんていう学びの機会では当然足りないわけですね。

例えば危機管理のところを考えていきますとですね、実際に危機管理やる場合にやっぱり体験的な学習の機会っていうのは必要だろうというようなことで、当事者意識が非常に大事になってくるだろうということです。

実はライフパニック学習という言葉は提唱したのが、阪神淡路大震災の後にそれを提唱したのは、お亡くなりになりましたが、流通経済大学の渡辺博史先生が、人生の中でいろんな困難が突然起こるわけですが、そういうときにパニックを起こさないためにはどうしたらいいのか。そこで大事なのはやはり普段から絶えざる学び、そういうことが必要になってくるのではないということですね。では、防災訓練をやればいかと、防災訓練も最初の一、二回は熱心にやりますけど、だんだんこんなもんかとやっぱりなってきましたよね。

そういう意味で言うと、参加に対する心理的なハードルを下げていくことも大事なというふうに思います。災害ってやっぱりいつ起こるかわからないわけですけど、そういうところで、いろんな学習機会というものも必要になってくるだろうということですね。その二つ目のところに入ってきますけど、先ほど情報の話見ましたが実際に市民大学っていうのをですね、見ていくと、実は日本ではですね、成人学習とかいう概念ってあんまりないんですね。

つまり学びというのは、義務教育あるいは大学ぐらいで終わっていて、その後どうなんだらうということで、地域の学びの機会っていうのは図書館がせいぜいと。つまり無料で本を借りて読んで学習することができる。それ以外に何かあるかっていうことですね。まさに今日の会場である公民館とか、いろんなところがあるわけですけど、その中で、先ほど坂口先生の方から出ましたけれども、90年代にトピック的なのは何て言うんですか、市民教授とか大学ごっこですね、いわゆる本当の大学ではないんですけど、つまり地域の人が教授になって、地域の人を教えるというようなこと、それから生涯現役という考え方がですね、出てきたのが1990年代の半ばぐらいです。そこで例えば、日立生き生き100年塾というようなものができてきたり、あるいは今は静岡市に合併されてしまいましたけど、清水エスパルスですね、清水市にはですね清見潟大学塾という、そこが実は市民教授の先駆けになっていました。

いろんな見方があるんですけど、これは文部省の社会教育官を務められた瀬沼克彰先生のまとめから引っ張ってきたんですけど、いろんな区民大学とか市民大学で二つ目が、今ちょっと話しました清見潟大学塾から生涯現役という言葉が広がって、2000年ぐらいまで来ました。大事なものは、成人の学びの場と特にこれからの、高齢社会、地域社会の主役というのは誰なのかと、先ほど坂口先生の最後のご提案にあった通りですね。

その辺と繋がってくるのかな。大事なものは限界を考えないと、つまり成長弾力性、よくですねレジリエンス、つまり打たれ強く継続してですね、成長し続ける、つまり年齢を重ねたからといって、多少、肉体的には弱くなっていくかもしれないけれども、経験というのは、非常に大事な蓄積になっていくというようなことがあるわけですね。

活発化するシニアと書きましたけど、埼玉県がやっている未来大学とか、私もそこに

ちょっとお話に行きましたけれども、平均年齢が72歳と皆さん非常にお元気で、実はコロナの最中にやったんですけれども、ちゃんとオンラインじゃなくて対面ですね。埼玉未来大学がやったり、あと長野県先ほど自由大学の事例、坂口先生から出ましたけれど、今でも同じ長野県ってのは非常にシニアの人が元気。それから例えば隣の栃木県なんかでもシルバー大学の開会式はですね、なんと700人ぐらい参加をしていくと。このときやはりコロナでオンラインでちょっと私お話をさせていただいたり、私の関わった自治体でも座間とか厚木とか、あと八潮市なんか八潮市市民大学とも20年ぐらい続いていてですね、2年間で1年目は地域のことを学ぶ、2年目はちゃんとレポートを書いてということで、八潮市には八潮市民大学院まである。そこを2年間終わった人は大学院に進んでまた勉強ができるということや、そこの修了生の中から、例えば地域の民生委員だとか、あるいは教育関係系で言うと青少年委員だとかあるいは社会教育委員だとか、あるいは教育委員とかの人材にも繋がるような仕組みに八潮市はなっていたりするわけです。

その次に、この長野県っていうのは公民館の数が実は日本一多くて、長寿県として知られてシニアが非常に活発というようなことです。

大事なものは、この受身から参加して、さらに想像すると、実はこのプロセスが先ほどのシブヤ大学はできているわけですね。

参加者が企画者に回って自分がやりたい講座を自分たちで作って自分たちの仲間としていくというようなことですね。これ非常に大事なプロセスだと思います。

そこでやはり自分自身が生きている環境というのを調整する必要があるんじゃないのかなと、やはり情報を意欲的に取っていくというような、例えばコロナのときワクチン接種予約ができずに、電話をしても繋がらないというようなことがありました。

そういう意味で情報通信技術を使えるようにするというのは、どこかで学習機会があっても私はいんじゃないかなと思います。

そういうところで言うと、若い人とシニアの世代が学びの循環というようなことで一緒に学べる場を作っていくことも大事なかなと思います。

それを社会関係資本という言い方をする場合もあります。例えば、学習意欲を継続するという意味で言うとイギリスでは成人の学び、非常によく研究利用されていて、声かけ一つ、日本の場合はよくとにかく頑張ろうっていうのは多いですけど、頑張るだけじゃなくて頑張ろうっていうほめ言葉ですね。

よくできましたとかですね、もっと工夫をしたらいいですよ。次はできますよとか、そういう言葉がけの実実はパターンが47通りもあるんですね。今度英語と日本語の問題とそういうことをサポートしてくれる間に立つチューターという制度がイギリスにはあるんですね。日本の場合はティーチャーとスチューデントとの関係、三者の関係にしていくと、つまり何でも教える専門家は大学の先生とか研究所にいるわけですけど、学習プログラムとか、あるいは個人のケアをしていくと、例えば今日ちょっとやる気があんまり起きなくて市民大学行きたくないという人も、例えばチューターがいると、ちょっと今は1回お休みしてでも来週からまたきましょうよとか、そういう声掛けをするような仕組みですね、こんなのも大事なかなというようなことで、イギリスの場合はだからティーチャー チューター トレーナーというような役割の分担ができています。

私身近なところでいうと、実は市民大学と同じように大人塾というのが杉並にあります。ここで二つのコースがあって、地域コミュニティコース、地域を探求していくというのと、もう一つがパーソナルデザインということで自分の学び直しで能力を高めていく二系統のことを連続講座でやっているのが杉並区です。もう一つ言うと杉並は、実はそのいわゆる市長部局というかですね、市長部局の方では杉並地域大学というのをやっていて、そこでは例えばウォーキングの指導者が今度必要だと、あるいは学校図書館のメンテナンスをするような人が必要だと。そうするとそういう講座を設けて、その修了した人その学校に派遣をしたりというようなことができたりしているわけです。

やはり何と言っても今人生 100 年時代なので、学び直しというのが非常に大事になってくるわけですね。そういう意味で言うとよく防災のところでは公助共助自助という言葉がありますけど、公助つまり公なところがやるところですね。行政と教育委員会が一番やるのは学校教育ですね。小中学校というような義務教育、それから自助自分で学ぶというのは図書館に行って本を読書活動するという学びがあったりするわけですね。

あるいは地域でいろんなことに出会って、たまたま学ぶみたいなことがあるんですけど、この実は真ん中の市民大学のノンフォーマルな学習、つまり共助のところですね。

つまり、みんなが集まってお互いに学び合うと、でも単に学ぶといっても学習プログラムはちゃんと整備をされているという、そのプログラム作りをシブヤ大学なんか自分たちがやって、自分たちの実現に繋げて、このところをこれからさやま市民大学は狙っていったらどうかと思っています。そういう意味で言うと、人間の成長というのは限界がないというようなことですね、このマズローという人はいくつかその欲求の段階があって、最後に来るのは自己実現と目指せ自己実現なんですけれども、そこに至るには安全の欲求とかいろいろ社会的承認とかということがないと。そういう意味でコミュニティですね、地域から栄養補給をするって言ったらかちょっと語弊がありますけど、例えば市民大学のようなところに関わることによって、情報を得たり知識を得たり、あるいはそこで仲間ができたりというようなことは非常に大事になってくると思います。

というようなことで場、拠点という意味で言うと、狭山にはですね、拠点があるわけですね。そこで学びの循環を作っていくと。ちょっと小さい字ですけど、快適な環境とか賢い消費者とか交通安全とかですね、いわゆる国際的な問題、あるいは人権問題とかこういうので学んだ後なんです問題は。もっと学びたくなったら、大学に行くとかですね、というようなものもあるでしょうし、放送大学みたいなのもあると、だからそういうところを目指していかれたらどうかというところで、私のお話を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

【山本】

ありがとうございました。

それでは最後にこれからの時代、市民大学に大きな影響を与えられられる ICT との関わりについて市民大学 ICT から考えるということで、郡谷様からご発表をお願い

いたします。

【郡谷】

はい、改めましてよろしくお願ひいたします。

3人の先生のお話、歴史を聞いて、事例を聞いて、その体系化されたものを聞いて、もう十分じゃないかなと思って良い時間にもなってきましたので、もうこのままいいんじゃないかなってちょっと思ったんですがやっぱり仕事しなきゃいけないよねって、ちょっと思い直しまして、改めましてちょっと私の方でお時間をいただきたいと思ひます。私の方では、ICTという言葉、これを使った市民大学、どうあったら素敵かなっていうことを今日はお話しようと思ひています。

私が言ひたいことを先にお伝えできるとすれば、ICTは道具です。

道具は使うものです。使われなくてくださってということをお話します。

もうご存知の方も多いかもかもしれませんが、ICT、改めてちょっと触れておきたいと思ひます。

今ICTがどういふふうに、特に教育の現場でどういふふうに使われているのか、それで当然ICTを使う上でメリットデメリットが出てまいりますので、その辺りを整理してお伝えしようと思ひています。

ICTって何でしょうかっていうことなんですけど、インフォメーションコミュニケーションテクノロジー情報通信技術という言葉に翻訳されたものになります。

技術ですからね、そういうものを使われる技術までわかると思ひますけども情報と通信を使えるようにするための技術、というふうに捉えていくと何となくパソコン、インターネットもそうですね。

電子メール、SNS、そういったようなものだと思います。おそらく皆様携帯電話だったり、スマートフォンだったりっていうのをもちだと思ひます。もう、情報を通信してやり取りができるようにするための技術だっているものであり、もう携帯電話であったり、あるいは黒電話ですら、実はICTなんですね。

そう考えると、実は皆さん既にICTを使いこなしている皆様、と言い換えることができるんです。もっと言ってしまえば、テレビもラジオもそうですね。

これも全てやり取りができるか、あるいは一方向に情報を取得するか、テレビを見ているか、ラジオ聞いているのかっていうようなところの違いはあるにせよ、皆さんは、こういった媒体を使って、道具を使って、情報が飛んできたものを自分の中で受け止めている。というふうな活動を日常されているわけです。ICT情報技術、情報通信技術と呼ばれるものが、皆さんの生活にずいぶん便利なものを得ているんじゃないかなと思ひますけど、考えていくと、どうやらICTを使っていくと便利なことができそうだと、っていうふうなイメージをわいてもらえるといいなというふうには思ひています。

ICT教育の今ということ、内容面を少し列挙しています。

まずは基本線です。その道具を使うということですね。今ICTに限らずその情報通信技術、もう本当にAIですとか、IoTという言葉が飛び交っていますけれどもわからないことはひとまず置いて、様々な技術が使われるようになる、あるいはそういう便利そうなものを使って、学んでみる。私だったらどうしようかなと思ひます、勉強し

た履歴っていうものが、ノートにしっかり書かれていけば便利ですけども、私が勉強したのはいつだったかしら検索っていう機能がついているだけで、ぱっとあのときの授業だったなっていうふうに思い出せるわけですね。

そういうふうな活用も当然できるわけです。

それから特に小学校、中学校、高校という学校に目を向けていくと、プログラミング教育というものが普及しています。

元々は論理的な思考を想定したものではありませんでしたが、やはりこの技術を革新的に使っていきこうっていうものは、この ICT 教育の最先端とっていいと思います。

そういった知識、技術、パソコンを使えるようになる、デジタルテレビのデジタル放送を見られるようになる。情報を見られるようにする。

その動作、このボタンを押せば次に行けるっていうところに置き換えていくと、それはデジタルリテラシーと言い換えることができます。

使いこなすためには、それ相応の技術、あるいは知識は必要ですということです。

教育の中では別のものを勉強しよう、歴史を勉強しようと思っても、まずは ICT を使おうって思ったときには、まずその ICT 自体を学ばなければいけないよねということですね。

それからコロナの時、大変な思いをしたご記憶もあるかと思うのですが、そのきっかけがあって、遠隔教育っていうものがものすごく発展しました。画面越しに顔を見ながら会話ができる。

ていうような機会は、未来感があったなと思うんですが、それもみんなが使えるようになってきているということです。

さらには、デジタルコンテンツと呼ばれますが言ってしまえば教材です。

いろんな教材がたくさん増えている。いろんな形で存在している、いろんな使い勝手ができるようなものが形としてあると。そして活用面というふうに考えていくと、やはり市民大学も含めて考えていくと、インターネットというようなツールは考えていかなければいけないのかなと私自身は考えています。

そうなってくると、いわゆるオンラインコース、インターネット上で勉強を、あるいは教材を、受講講座を提供する、あるいはそれを視聴して勉強するということができるようにしなければならない。実際、大学教育機関あるいは自治体の教育機関が主体になった JMOOC と呼ばれるもの、様々な大学が自分自身のそこに所属している先生が教材を提供しているっていうようなところもあります。

さらには、デジタル教材いわゆる YouTube の動画も一つデジタル教材と置き換えてもいいかなと思います。

そして教育のアプリ、スマートフォンでいろんな教材、英語の勉強もできます。カメラをかざすと翻訳できてしまいます。

そういった技術は、教育に生かせるんじゃないだろうかっていうことも当然考えられますし、勉強って、到達できることが、モチベーション動機づけに繋がっていきま

す。

そうなると、学習を管理してくれるシステムというものも必要になってきます。人によっては、さらに新しい知識を得ようというので、プログラミング教育もあろうかと思えますし、さらにはもっと今は VR AR 拡張型現実と言われるような実際にそこ

にはないのだけれども、カメラをつけたらそこに知らない人が立っている。その人と会話ができるっていうようなことも、もう教材にしてしまおうというふうなことが実際行われています。

さらには、今、私はありがたいことに、皆さんと対面でお話をしていますけれども、これが当初の予定では、リモートでオンラインで画面上、私ここで参加してお話をしていたというふうなことだったんですが、期せずして、ここにお邪魔することができましたけれども、そういう、もう対面環境にとらわれない、ICTの教育っていうものは実際に今行われてきています。

そうなってくると、メリットまず良いところはアクセスの拡大です。

もし私が今日、飛行機が飛ばなかったならば、画面上で皆さんとお会いすることは可能になります。

もう都市とか物理的な距離、あるいは国を超えて、人と繋がるような設定ができるっていうところは、そこはメリットの一つだろうと思いますし、学習の個別化、今その技術の革新によって、自分の得意不得意っていうものがAIというか、わかるようになってきています。

だから、自分自身の苦手な部分を勉強しようってなったら、もうパソコン上で、今日はあなたの苦手なここを頑張ってみましょうっていうふうに、自分に適した教材を持たしてくれるようになってきます。

さらにはインタラクティブ、座学にとらわれない、様々な人と関わる、あるいはゲーム性を持ったものというふうなところで、いろんなツールを使えると自分に合ったものを見つけられて、学習意欲っていうものも高まるという希望も持てるわけです。

そういったようなことも可能になってきますし、やはりいつも自分の都合のいいときに見られる。動画ってテレビの録画もそうですよね。後で見ればいいっていうこともできます。時間と場所が柔軟性を持てる場所もあります。

さらには、新しい情報にアクセスできる場所、インターネットで探す、今一番新しい情報っていうのが見られるところもメリットです。

さらにはコラボレーションいわゆる共同活動というかね、皆さんと座学でワイワイやるようなことも、実はICTの中では得意としている分野でもあるわけです。

一方でデメリットも当然あります。得意な人はどんどんできる。苦手な人は、どんどん置いていかれてしまう。格差といったものが生じやすくなってしまうというような悪いところもあります。

あるいはもっと言うと、技術に依存してしまうというふうなことです。何を言いたいかという、例えば私が画面上で出ていたとします。

それがちょっとインターネットのトラブルで使えなくなりました。

ちょっと通信がおかしくなりました。

もう私この場所には出てこれません。

これが技術の依存というふうなところの結果になるわけです。様々な形、代替物を用意しておかなければいけないってそういう手間がかかってきてしまいます。

そして、集中力の欠如です。もう、私、いつもね、大学生を相手にしてるんですが、皆さんのように、本当に真剣に私のことを見ながら授業を受けてもらえたらどんなに幸せだろうかというふうな今、心から思ってます。

学生にもちょっと伝えておきたいと思いますけれども、学生、とかく集中力が続きません。

集中する訓練がまだできてないということもあるんですが、スマートフォンだったり、パソコンを使いながら作業していくと、調べものしてたら、次、インターネットへ行って、自分の好きなゲームの画面にいつちゃってるなというような集中力の欠如が、起きやすくなります。このインターネットの画面パソコンの画面の向こうは見たいもの、今見ちゃいけないものも見えちゃうんです、それは、やっぱり集中力の欠如になります。

そして、対面コミュニケーションの欠如、これが今回でいうと私がどうしてもここに来たかったっていうのは、画面越しでは皆さんの様子を十分把握できないからです。これはどの技術、これまでずっと言われてきてるんですけれども、2割減、あるいは3割減情報が削減されてしまうというふうな調査もあります。

やはり、対面であることのメリットが、ICTを使うことのデメリットになるというふうな話になってきます。

もう一つ自己管理能力というところです。やはり環境、誰か先生が、これを今日はこれをやりなさい、あれをやりなさいと言ってるわけではなくて、自分自身が今日はこれをやってみよう、あるいはこういうふうなことでプログラムを組んでるからやってみようとかそういうふうなことで考えていくと、やはり自分自身が目標を持ってやっていると、続かないですよ。3日坊主っていうのは、自己管理能力が低かったから起きているというふうなこともあるわけです。

最後に、お金の問題です。やはりここは外せないですよ。

ここをどういうふうな解決していくのか、誰に相談したらいいのかっていうところは、当然、やはりここは1人では解決できないところになります。

時間的なものもあります。今、遠隔 Zoom とか様々なビデオ会議できるようになりました。日本で初めて教育利用をしようと思ったのが、いつだったろうかという紹介です。これは私の古巣の発行している雑誌なんですけれども、1986年の3月、INSを利用した大学での教育実験というので、国際キリスト教大学と亜細亜大学がNTTに協力して実施したものになります。今で言うところの遠隔講座です。画面越しに先生がいて先生の喋ってることを勉強する、あるいは質問するということをやったという事例でして、いわゆる最近聞かれなくなりましたが、視聴覚教育ですね、見る・聞く・覚えるための教育、そういった研究、第一線で活躍されていた中野照海先生という方と、亜細亜大学におられた平沢茂先生という方がこのNTTの依頼に応じて、この実験をやったというような記録になっています。当時1986年の中で、時間空間を超えた教育の世界は大きく広がると、この時から言われていたわけです。

一方で課題も見えてきて、より手軽なシステムが開発されないと、実現は難しいだろうと言われておられましたし、そのシステムを使いこなす人材が、必要だろうということも見えてきた。

さらには音声処理の安定性を確保しようと、結果として課題が見えてきたということになります。

1番2番については比較的、今現時点で実現できています。

ズームだったり、あるいはスマートフォンでテレビ会議、お孫さんの写真と一緒に

元気かとできるようになったのは、まさに手軽なシステムが開発されてるからということになりますし、できなければ、誰か得意な人にやってもらおうと言うことが容易に考えられる。とりあえずあの人に相談してみようから、人材の育成というところでもなっているかなと思います。

ただ、音声処理に関しては、まだまだ技術の進展が求められるということは、言えるんじゃないかなと思います。

今でも音の遅延といったものは発生しているので、この技術っていうのはまだまだ解決できていない課題となっています。

もう一方で、教材に関する著作権に関することは、やっぱり配慮が必要だろう。資料というものは皆さん方にお配りできるものだからこそ、配布できている。著作権法の35条です。それを元にしながら教育利用という形で使えるものなのですが、これがオンラインインターネット上に配信するとなると、さらにその対象が広がってきてしまうのでその問題は難しく、実際に今、大学教育を中心に取り組みはなされているんですが、そのあたりも難しく、まだまだ大変だと思っています。

最後に個人情報漏洩っていうところは、気にしたいと思っています。

今日は、この辺りをお伝えして私のお話はここまでにしたいと思います。

ありがとうございました。

#### 【山本】

郡谷先生ありがとうございました。

一通りご発表いただきましたが、時間的な問題も非常に迫ってきておりまして、ここで討論をしていただきたいと思っております。それぞれ皆さん方からたくさんいろんなヒント等をいただきました。

そこでここでは、市民大学開設プランに掲げられ、取り組み始めた目的というのがあります。それに沿った形で三つの事業が市民大学に期待されていたわけですが、その三つのことについて達成するためにどうしたらよいか、また事業を実施すべきか、必要性であるとか事業におけるそれらの位置づけ、あるいはあり方などについてご意見をいただければと思います。

まち作りを担う人材の育成事業から、学びの成果を地域社会の中で生かす仕組み作り事業、学びを通しての生きがい作りと仲間作り事業この三つを行うというのがこのさやま市民大学でございました。これについて、ご意見をいただき、また先生方の間でご質問いただけると大変ありがたいと思います。

#### 【坂口】

よろしいでしょうか？ありがとうございます。今日、パネリストの方のご報告聞いていて、さらにさやま市民大学の場合どうするんだらうという疑問を持ちながら、聞いてたところなんですけど、まち作りを担う人材の育成って簡単なようで、すごく難しい。どういうまちなのかっていうのが、まず関係しませんか。それからどういう学習のニーズがあるのかっていうことも関係してくると思います。

どうやったら学習ニーズってわかるんですか。どういうふうにまちについての思いを共有していくのか、てどういう場所があると、こういうまちがいい。こういうふう

なればいいというようなことを今日、何なんでしょう、話し合えるのかっていうことを少し疑問に思いました。シブヤ大学はどうなさっているのかとか、それから近藤さんは、杉並地域塾とか大人塾もやってらっしゃるのかなとか思ったり、少し教えていただけたらと思ったんですが。いいですかそんな質問を願いできますか。

#### 【近藤】

杉並大人塾というのはもう20年ぐらやっていて、1期生2期生みたいな形で大人塾連ということですね、毎年1回公民館まつりのような形ですね、世代間を繋ぐような役割とそこから例えばその地域の居場所作りみたいな事業がスピンオフとして生まれてきて、そこにまた新たな人が集まってきてるとい、学びの連鎖反応みたいなのが起きている。どういう大人塾でプログラムを作るかということに関しては杉並区の社会教育センターに、実はその社会教育主事という専門職の方がいるので相談をしながら、いろんな専門家と繋いでいたり、あるいは杉並の地域作りに合いそうな人をいつもリクルートしてるわけですね。

それで、この人は良さそうだという人を常に複数ですね、リザーブをするというような形で実際にやったその成果の発表みたいな場を作りながら、その発表のときは全員なんていうか、区民に開放していろんな人がそこに来れると。そこでまた次の大人塾の何て言うんですか、リクルート活動じゃないんですけど一緒にやりませんかという声掛けをするとそういうふうに蓄積をされてきて、ローテーションって言ったらいんですかね、一つプロジェクトが終わったらこの3セットということでもんどもん、中心になるメンバーが変わっていくとそういう仕組みでやっています。

はい、以上です。

#### 【山本】

はい、ありがとうございます。修了生のその後のケアと地域作りの関係をどう進めるかっていうところのお話だったかなと思います。会を作るとかっていうことはよく行われますけども、それにとどまるのではなくて何とかまち作りに繋がられるような試みをする。しかもそれは成果を区民に公開していくというところが、市民大学のやってみるの意味にもまた繋がってくるのかなかなと思われま。確かに最初に言われたように、人材の育成というのは大変難しいということではあるんですけども道がないわけではないというところがあるのかなと思いました。

そういう意味では、今もその一つということかと思えますけども、まち作りを担う人材の育成事業をするということではなくて、今度その成果を地域社会の中で生かす仕組み作りというのが、さやま市民大学の中では掲げられていたわけですけども、今教えていただいた修了生のその後のケアで、地域作りに繋げていくということですが、そういう仕組みというは、どういうふうにして生まれてくるものなのか、あるいはもう少し自由にさせてそのまま後ろで見てるといったようなことが大事なのか、その辺はあのシブヤ大学さんなんかの事例からするとどうなのかちょっとお聞かせいただくとありがたいと思えますが。

#### 【大澤】

そうですね、まさにシブヤ大学も非常にここは難しいなと思いつながら、日々取り組ん

でいるところなんです、先ほどの発表でも紹介いたしましたが、まず一旦は、シブヤ大学に来ればその場所に来れば安心してチャレンジができるとか、作り手になれる機会っていうのを、まずはこの市民大学の中で作るということが一つ。

何でしょう、シブヤ大学に参加して自分で講座を企画している人たちからよく聞かれるのは、仕事では失敗できないけれども、シブヤ大学では失敗できるっていうふうに言う方が多いんですね。本当に大失敗になってしまうと問題があるんですが、でもなんかその感覚はすごくいいなと思っていて、小さな成功体験を積める場、例えばもう街で狭山市がこういうふうになったらとか、こういう場が欲しいな、自分がちょっとやってみようかな、でも1人だと難しいなっていうときに、さやま市民大学に来るとそれを応援してくれる人がいたり、いいねって言ってサポートしてくれる方がいたり、もちろん上の世代の方が聞いてくれる。若者からすると聞いてくれる、何か自分にもできるかもしれない、これならって思えるっていうことを、まず市民大学の中で作ることができると、何かそれが狭山市というまちを舞台に行われているような活動だと、自然と今度は市民大学の外に出ても何かできるかもしれないっていう感覚に繋がるのかなと思うので、市民大学を介して学びという手段を通して仲間とか、同志に出会えるみたいなそういった仕掛けがまちとの接点を持ちながら作れるとすごく可能性はあるんじゃないかなと思いました。

#### 【山本】

ありがとうございます。

ただ単に講座を実施するというだけではなく、そういう何かやりたいっていうことがあったときに、相談に乗ってもら。しかもその相談というだけではなくて伴走的にいろいろ関わってもらえるような安心できる環境を整える中で地域活動に向けていくっていう、そういうことなのかなというふうに思いました。簡単ではないということなのかなと思いますけども、やはりそういう環境を整えていかないと、こういう講座を実施しましたとかだけでは、なかなか難しいところがあるんだなと思いました。そういう意味では、仲間作りとかの生きがい作りっていうのはやはりすごく大事なわけですけども、そういうものをニーズを踏まえながら進めるっていうことだとは思ってますけども、いろんな事柄が今後考えられるかな。

講座の実施の仕方についてもですね、いろいろ考えられるかなというふうに思うんですけども、今日、郡谷先生せっかくお見えですので、市民大学今後どういう講座の持ち方であるとかですね、いろんな体験のさせ方であるとか仕方であるとか、そのところちょっとヒント的なことがもしあったら、教えていただくとありがたいなと思います。

#### 【郡谷】

ICTをもしその市民大学に取り入れてみようってなったときには、どうなるのかっていうことなんです、実はそんなに難しいことではないかなと私自身は思っています。何より背伸びしないことが大事なんです。自分たちには何ができるのか、できないのかっていう、まず自分の立ち位置をしっかりと見定めてみて、それで他で成功事例はたくさんあるわけなんです、その人たちは何をしていたのかと言えば、味方

を探してきているということなんです。

札幌市の生涯学習センターでボランティアがいます。そのボランティアたちの特徴的な活動、最近の活動として、皆さんと同じぐらいの世代の方たちなんです。コロナによって自分たちの企画したものができないってなったから、自分たちどうしようか。

やっぱり ICT 使う方がいいんじゃない。一步踏み出してます。踏み出すためにはどうしたらいいかって、近くにいる大学生をボランティアに引き込んでます。そういった見方をつける。

ただその代わり、自分のやりたいことは何かなっていうのをしっかり定めてみるというところがやっぱり必要なのかなと思います。

もう一つ、自分たちの武器を探しましょうということなんです。JM00C を少ししかお話しできなかったんですが、公的機関であればどこでもできます。

教育機関であればどこでも利用できます。

であれば、狭山市の中だけにとられる必要はないですかということなんです。

狭山の魅力をどんどん発信しませんか？そういうところに味方ができれば、外からの目線から新しい学習が生まれるかもしれません。味方を作るっていうところに、私自身は尽きるのかなというふうに思います。ひとまずここまでにしたいと思います。

#### 【山本】

はい、ありがとうございました。そういう意味では今後の可能性がいろいろあるということに繋がるかと思しますので、この辺はまた研究させていただきたいと思えます。仲間作り、生きがい作りということに絡めていくと、これまでもお話があったわけですけど、何かこれだけはこのことがもしありましたら、時間的なこともありますので、一言ご発言いただくと大変ありがたいんですけども。一言ずつ、はい、ありがとうございます。

#### 【坂口】

シブヤ大学の若い人たちがわくわくモヤモヤっていうのをもち寄って、学習のプログラム作りを考えるっておっしゃっていて、これは年齢に関係なく、わくわくもモヤモヤもあると思いませんか？私が事例を持ってきたのは、全てオープンであろうとして、いろんな人のわくわくモヤモヤを集める場所を作っている相談会だったりとか、月に1回だけとかくオープンキャンパスをすとか、何かいつも開き続けるっていうこと、新しい人のわくわくモヤモヤを持ってきてもらえるような、何か窓口をわかりやすく作る、それはもしかししたら、オンラインで何かここにお願いしますってことでもいいかもしれないし、そういったいろんな方法があるんだろうなと思っております。以上です。

#### 【山本】

ありがとうございます。続けてお願いします。

#### 【大澤】

そうですね。また私は若い世代目線というところでお話をすると、やはりシブヤ大学で起きていることってというのは、ある日、ある種、日常生活がまちと繋がっていると同時に、なかなか外では見られない光景といますか、例えば大学生が70代の方に意見を申しているとか、すごくフラットに学んでいる。多世代が、多様な背景を持つ多世代がフラットに学んでいるっていう点で、先ほど近藤さんから居場所ってお話がありましたけれども、友達でもない、同僚でもない、家族でもない人たちっていうような関係性ができてくるのかなと思っておりまして、何かそこが学びっていうものの学びの場という物の持つ良さでもあると思うんですが、ともに学ぶっていう環境になると、年齢も知識量も本来ならば関係なく、みんなが生徒であるっていうようなことが作れるっていうところが、市民大学の一つ武器なのかなと思っていて、何かそういう意味では、先ほどから話に出ている、横の繋がりと縦の繋がりも含めてですけどもうまくその学びの場というところを使って、そうした家族でもない、同僚でもないなかなか外には出られないような子が、ここに来ると出会える人たちで、その人たちに会うために来てるみたいなことになっていく方が増えると、すごく仲間作りとか生きがい作りという視点では、新しい可能性が出てくるんじゃないかなと感じました。

【山本】

はい、ありがとうございました。近藤先生お願いします。

【近藤】

生きがい作りとか、あるいは仲間作りと、意外に地域に住んでいても地域のことを知らない。そこでですね、また新しい出会いがあるというようなことをよく聞きます。

そういうところで言うと、また目標をどこに置くのかと。実は6月25日ですね。文部科学大臣の方から、中央教育審議会に質問がありました。タイトルの最初が、地域コミュニティの基盤形成と最後のところにその社会教育のあり方ということで、つまり国としても、そこに実は急に注目をし始めているところなんです。少し具体的に言うと例えば、市民大学で学んでいきがい作り仲間作りの、次のステップとして、例えば社会教育士というような、一定の講習を受ければ、そういう名乗れる称号というのを文部科学省の方で認めていると。例えば、こういう地域コミュニティの基盤形成をするには、どういうスキルだとかマインドとか、考え方が必要かということを読んでいくと、さらに活動も広がりますし、そういうことを目指す人たち同士の、また仲間がいろんなところで活躍する。実は社会教育士を目指すということで、先ほどの杉並の大人塾に参加された方が、次の目標として社会教育士を目指そうという動きも始まっているところなんです。以上です。

【山本】

はい、ありがとうございました。郡谷先生お願いいたします。

【郡谷】

お三方のお話伺っていて、ふと思い出したことなんですが、確か去年足立区の楽学の

会という市民大学に近い大学塾なんですけれども、20周年を迎えるにあたって、次何しようかっていうような話をしていたそうです。その中で、スタートは一般教養、いわゆる歴史とかそういったようなものだったんですが、シフトしていったら、今たどり着いてるのは地域課題なんだそうです。

地域課題に取り組むためには、若い人にも協力してほしいし、それを引き込むための工夫というものは、どういったものがあるんだろうねっていうようなことから、少しそこでICTに絡められるとすると、学習管理、学習の履歴が見えるようなものから、例えば受講生がこういったものを学んで、こういった経験をしていくと、こういう資格が任意の資格が得られます。こういう経験をしましたよっていう経験を証明できるものが何かできないか。ICTとかオンライン上ではオープンバッチっていう言葉があるのですが、そういったことが、意外に若い人、資格好きです。活動するために私こういうことをやってきましたとやりたがります。そういうのも活用のしどころの一つなんではないかと思えますし、見えるものもいいです。例えば欽ちゃんの仮装大賞の結果がランプ付きますよね。合格の赤い線越えたら、この人に頼んでみようかなって思えるし、自分も満足できるって、やっぱりそういうお互いに見えるようになる、共有する一つの言語になれるっていうのは、一つICTの可能性なのかなと思いました。以上でございます。

#### 【山本】

はい、ありがとうございました。ただ受講してもらおうというだけではなくて、そういった受講歴のようなものがわかるようにするとか、将来の見通しを持てるようにしていくような仕組みを取り入れていくと、そういうことが励みにもなるんじゃないかということかと思えます。時間がずいぶん過ぎてしまっているのですが、お約束しましたので、会場の方から、どなたかお1人、ご質問を受け付けたいと思います。ご質問ございましたら、ご遠慮なく挙手して、どなたに対するご質問かということ、質問していただければと思います。

#### 【参加者】

非常に4人のパネリストの中身がですね、非常に濃くて覚えられない。それで、今日は、一つ印象に残った大澤さんにご質問したいと思います。価値観、それから価値観の多様性と地域性というのは背景にあると思うんですが、一番聞いてびっくりしたのはですね。30代40代の方が非常に多いと。普通我々が考えると、もう仕事でヘトヘトになって、それで結婚している方は家庭も見なきゃいけない。そういう状況で、そのシブヤ大学の門を叩く気になるというのは、非常にびっくりしました。どういう仕掛け、あるいはどういう手法が大学に引き入れる秘訣なのか、そこをぜひ伺いたい。

#### 【大澤】

そうですね三、四十代が多いっていうところで、まさにおっしゃっていただいたように、皆さん本当に忙しくて、疲れていてっていう、正直そうだなと思っているんですけども、一つ大きな特徴かなと思っているのは、基本的に講座自体が土日開催であ

るっていうところと、平日であっても、夜の7時半以降、8時ぐらいからっていうところで、時間帯はかなり気を使っているっていうところがあります。

あとは、やはり単発の講座が多いので、なかなか半年間の講座に全部出席することは難しくても、無料っていうところもあります。ちょっと、この今週末は時間があるな、何かちょっと違うことをしたいな、新しいことをしたいなっていう方がネットで検索をして、ふらっと参加できる場所も一つ特徴なのかなっていうふうに思っております。入口はなるべく気軽に無料で、1回2時間程度で、ふらっと何か渋谷に買い物に来るついでに参加できるような入口を広く持っておこうっていうのは、常に考えているかなと思います。大丈夫でしょうか？ありがとうございます。

#### 【参加者】

それではちょっと納得できないんですけど今の説明。30代40代ですよ。もうヘトヘトになってね、市民大学に首を突っ込む気になってないはずなんですけども、私の経験で言えば。なぜそこへ引き込まれるのかそこが知りたい。

#### 【大澤】

そうですね。私も聞きたいところなんですけど、あとちょっと思いつくところと言うと、特徴としては、意外とですね、例えばお子さん連れで来てもいいですよっていうような講座を何回か過去にやってみたことがあるんですが、もちろんニーズは、あるはあるんですけども、意外と、いや、シブヤ大学は1人で行きたいっていう方が多かったです。自分の時間、自分だけのための時間として、来たい場所なのかもしれないなというふうに思ったりもします。なので、意外と夫婦で来られる方とか、お友達同士で来られる方とか、お子さんを連れてこられる方っていうのはすごく少なく、皆さん1人で来られるっていうので、そういった方が来やすい空気感ができているのかなっていうところと、あとは先ほどから申しているように、企画している人自身が市民であるというところで、等身大の問題意識を掲げているような授業のテーマが多いので、本当に専門知識ですとかスキルはYouTubeで検索すれば、すぐに出てきて、効率的に学ぶ、自分で家で学んだ方が早いと思うんですけども、もう少し違う目的で、このことにモヤモヤしてるんだけど周りには話せないから行こうとか、ずっと気になってたんだけど、1人ではなかなか始められないから行こうとか、何かそういったきっかけの場所っていうのが、意外とないのかもしれないなというところで、そういったニーズを感じてる方が来てくださっているのかもしれないなというのを感じています。

#### 【山本】

はい、ありがとうございました。今日はちょっと消化不良のところもあるかもしれませんが、もう一度思い出していただくのと今日近藤さんの方から寄贈していただいた社会教育の記事ももう一度お読みいただければと思います。今回わかったことは、市民大学というのは全部そう、狭山市の市民大学のような大学ではなくて、いろいろな形のものがあるということです。今回、全部を紹介していただけたわけではないんですけども、雑誌の記事を参考にしながら、また調べていただけるとありがた

いなと思います。

最後に坂口先生の方から、地域のプレーヤーを育てるっていうことが、やはり大事だということをご指摘いただきました。

ですから、引き続き、さやま市民大学では、そういうことを考えていかななくてはいけないのではないかなと思います。

また、まち作りのためのいろんな学び、あるいは個人が熱心に取り組むことであるかもしれませんが、そういう人の方の視点からの場作りというものがやはりないと、気軽に来れない。そういうところも、市民大学の方では配慮していかななくてはいけないのかなと思いました。

また、近藤先生の方からは、受身であった人が参加し、創造する方へ変化してくる。つまり、学びの応需、そういう形での学びの循環というのが、その各場所に求められるということで、場における学びの循環というものを大事にしなくちゃいけないというのが、今回大事であったように思いました。

人間の成長には、限界がないんだということを頭に置きながら、進めていく必要があるなというふうに思います。

また、ICTは道具で使われないようにというのが最初にございました。

その後もいろんなアイデアをたくさんご提示いただきましたので、今後それらを十分に考えながら、新しい講座を作っていきたいなと思って考えました。

地域を知らないけれども、新しい繋がりが市民大学に参加することによってできるというのは、すごく大事な点ではないかなと思います。そういう意味で市民大学の目標も、これまでのことを踏まえながら、時代に即した形で新しいものに変えながら、市民と一緒に作っていけるというものを、目指せればいいのではないかなと考えました。

今日は、皆さん方以上に私の方がすごく勉強になったシンポジウムであったように思っていました。これから、また皆さん方と一緒に作り上げていく市民大学というものが求められていることは間違いありませんので、引き続きいろんな形でのご協力をいただくと大変ありがたいなと思っております。

時間がずいぶん過ぎてしまって、私の進行の仕方をまずお詫びして、最後に今後のさやま市民大学の発展に、皆様のご協力をお願いして、最後の言葉にさせていただきたいと思います。

本日は4名のパネリストの先生方本当にありがとうございました。お疲れ様でした。

#### 【司会】

コーディネーターの山本学長、坂口様、大沢様、近藤様、郡山様どうも本当にありがとうございました。

以上をもちまして、本日のシンポジウムを終了させていただきます。なお、皆様のお席に本日の講演会のアンケートを配付させていただいております。

お手数ですが、お手持ちのスマートフォンで2次元バーコードを読み取り、ご入力いただくか、用紙にご記入の上、会場出口の回収箱にご提出いただきますようお願いいたします。それでは本日はありがとうございました。気をつけてお帰りください。ありがとうございました。